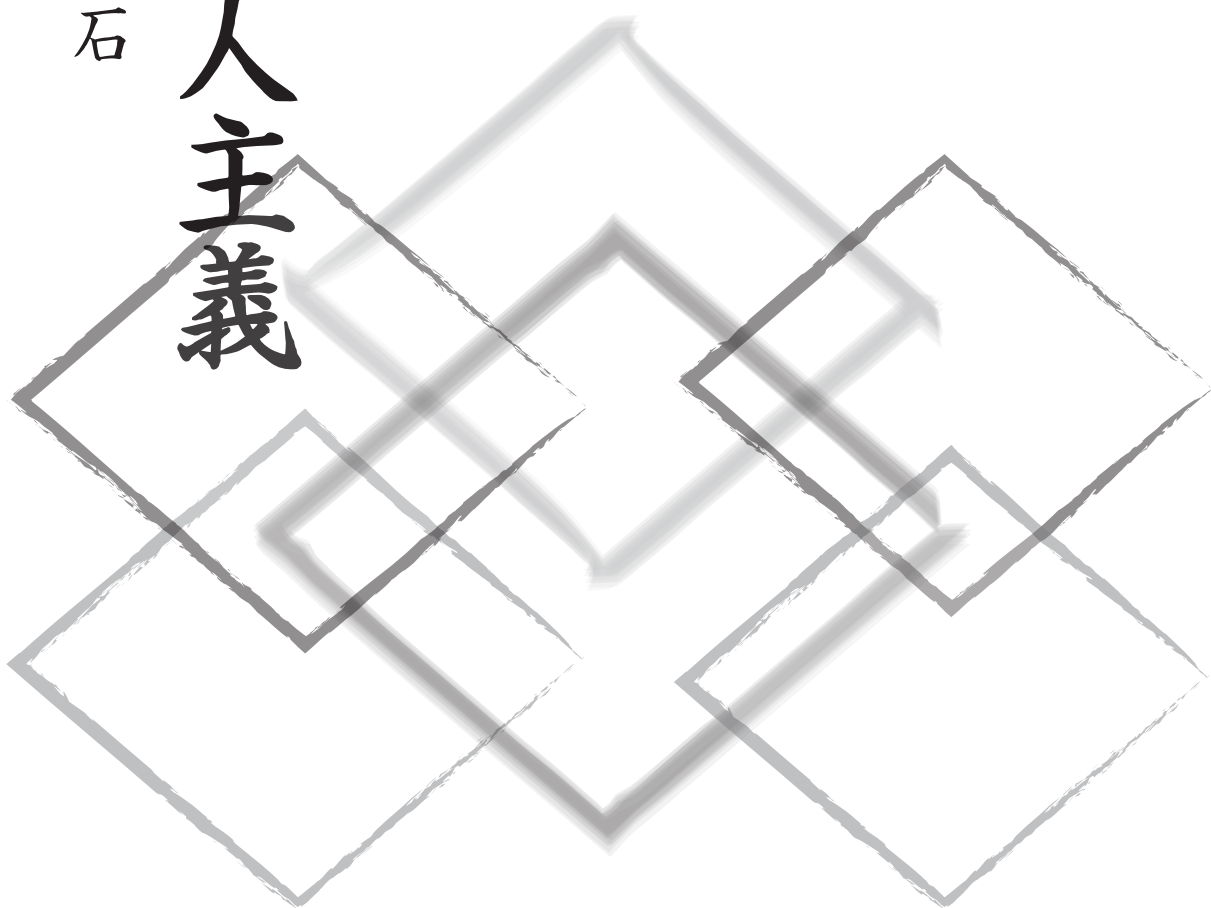


私の個人主義

夏目漱石



一冊堂青空文庫

私の個人主義

夏目漱石

——大正三年十一月二十五日学習院輔仁会において述——

私は今日初めてこの学習院というものの中に這はい入りました。もつとも以前から学習院は多分この見当だろうぐらいに考えていたには相違そういありませんが、はつきりとは存じませんでした。中へ這入ったのは無論今日が初めてでございます。

さきほど岡田さんが紹介しょうかいかたがたちよつとお話になつた通りこの春何か講演をというご注文でありましたが、その当時は何か差支さしつかえがあつ

て、——岡田さんの方が当人の私よりよくご記憶きおくと見えてあなたがたにご納得のできるようにただいまご説明がありましたか、とにかくひとまずお断りを致いたさなければならん事になりました。しかしただお断りを致すのもあまり失礼と存じまして、この次には参りますからという条件をつけ加えておきました。その時念のためこの次はいつごろになりますかと岡田さんに伺うかがいましたら、此年ことしの十月だというお返事であつたので、心のうちに春から十月までの日数を大体繰くつてみて、それだけの時間があればそのうちにどうにかできるだろうと思つたものですから、よろしゅうございますとはつきりお受合うけあい申したのであります。ところが幸か不幸か病氣に罹かかりまして、九月いっぱい床とこについておりますうちにお約束やくそくの十月が参りました。十月にはもう臥ふせつては

おりませんでしたけれども、何しろひよろひよろするので講演はちよつとむずかしかったのです。しかしお約束を忘れてはならないのですから、腹の中では、今に何か云いつて来られるだろう来られるだろうと思つて、内々は怖こわがっていませんない。

そのうちひよろひよろもついに癒なおつてしまつたけれども、こちらからは十月末まで何のご沙汰さたもなく打ち過ぎました。私は無論病気の事をご通知はしておきませんでした。が、二三の新聞にちよつと出たという話ですから、あるいはその辺の事情を察だれせられて、誰かが私の代りに講演をやつて下さつたのだらうと推測して安心しました。ところへまた岡田さんがまた突然見えたのであります。岡田さんはわざわざ長靴を穿はいて見えたのであります。（もつとも雨の降る日であつた

からでもありましようが、）そう云った身拵えで、早稲田の奥まで来て下すって、例の講演は十一月の末まで繰り延ばす事にしたから約束通りやつてもらいたいというご口上なのです。私はもう責任を逃れたように考えていたものですから実は少々驚ろきました。しかしまだ一カ月も余裕があるから、その間にどうかなるだろうと思つて、よろしゅうございますとまたご返事を致しました。

右の次第で、この春から十月に至るまで、十月末からまた十一月二十五日に至るまでの間に、何か纏ったお話をすべき時間はいくらでも拵えられるのですが、どうも少し気分が悪くつて、そんな事を考えるのが面倒でたまらなくなりました。そこでまあ十一月二十五日が来るまでは構うまいという横着な料簡を起して、ずるずるべつたりとその

日その日を送っていたのです。いよいよと時日が逼つた二三日前に
なつて、何か考えなければならぬという気が少ししたのですが、や
はり考えるのが不愉快なので、とうとう絵を描いて暮らしてしまいま
した。絵を描くというとかかえらいものが描けるように聞えるかも知
れませんが、実は他愛もないものを描いて、それを壁に貼りつけて一
人で二日も三日もぼんやり眺めているだけなのです。昨日でしたかあ
る人が来て、この絵は大変面白い——いや面白いと云ったものではあり
ません、面白い気分の時に描いた画らしく見えると云つてくれたので
した。それから私は愉快だから描いたのではない、不愉快だから描い
たのだと云つて私の心の状態をその男に説明してやりました。世の中
には愉快でじつとしていられない結果を画にしたり、書にしたり、ま

たは文にしたりする人がある通り、不愉快だから、どうかして好い心こころ持もちになりたいと思つて、筆を執とつて画なり文章なりを作る人もあります。そうして不思議にもこの二つの心的状態が結果に現われたところを見るとよく一致いっちしている場合が起るのです。しかしこれはほんのついでに申し上あげる事で、話の筋に関係した問題でもありませんから深くは立ち入りません。——何しろ私はその変な画を眺めるだけで、講演の内容をちつとも組み立てずに暮らしてしまつたのです。

そのうちいよいよ二十五日が来たので、否いやでも応おでもここへ顔を出さなければすまない事になりました。それで今朝けさ少し考かんがえを纏まとめてみましたが、準備がどうも不足のようです。とてもご満足の行くようなお話はできかねますから、そのつもりでご辛防しんぼうを願います。

この会はいつごろから始まって今日まで続いているのか存じませんが、そのつどあなたがたがよその人を連れて来て、講演をさせるのは、一般の慣例として毫ごうも不都合でないと私も認めているのですが、また一方から見ると、それほどあなた方の希望するような面白い講演は、いくらどこからどんな人を引張ひっぱつて来ても容易に聞かれるものではないかろうとも思うのです。あなたがたにはただよその人が珍めづらしく見えるではありませんまいか。

私が落語家はなしかから聞いた話の中にこんな諷刺的ふうしてきのがあります。――昔むかしあるお大名が二人目黒辺ふたりへ鷹狩たかがりに行つて、所々方々を馳かけ廻まわつた末、大變空腹になつたが、あいにく弁当の用意もなし、家来とも離はなれ離はなれになつて口腹を充みたす糧かてを受ける事ができず、仕方なしに二人は

そこにある汚きたない百姓家へ馳ひやくしやうやけ込んで、何でも好いから食わせろと云ったそうです。するとその農家の爺じいさんと婆ばあさんが氣の毒がつて、ありあわせの秋刀魚さんまを炙あぶつて二人の大名に麦飯を勧めたと云います。二人はその秋刀魚さかなを肴さかなに非常に旨うまく飯を済まして、そこを立出たちいでたが、翌日になつても昨日の秋刀魚の香かおりがぶんぶん鼻を衝つくといった始末で、どうしてもその味を忘れる事ができないのです。それで二人のうちちの一人が他を招待して、秋刀魚のご馳走ちそうをする事になりました。その旨むねを承うけたまわつて驚ろいたのは家来です。しかし主命はんめいですから反抗する訳にも行きませんので、料理人に命じて秋刀魚の細い骨を毛拔けぬきで一本抜ぬかして、それを味淋みりんか何かに漬つけたのを、ほどよく焼いて、主人と客とに勧めました。ところが食う方は腹も減へつていず、また馬鹿ばか

丁寧な料理方で秋刀魚の味を失った妙な肴を箸で突っついてみたところで、ちつとも旨くないのです。そこで二人が顔を見合せて、どうも秋刀魚は目黒に限るねといったような変な言葉を発したと云うのが話の落^{おち}になっているのですが、私から見ると、この学習院という立派な学校で、立派な先生に始終接している諸君が、わざわざ私のようなものの講演を、春から秋の末まで待ってもお聞きになろうというのは、ちようど大牢の美味に飽^あいた結果、目黒の秋刀魚がちよつと味わってみたくなつたのではないかと思われるのです。

この席におられる大森教授は私と同年かまたは前後して大学を出られた方ですが、その大森さんが、かつて私にどうも近頃^{ちかごろ}の生徒は自分の講義をよく聴^きかないで困る、どうも真面目^{まじめ}が足りないで不都合^{ふつごう}だと

いような事を云われた事があります。その評はこの学校の生徒についてではなく、どこかの私立学校の生徒についてだったろうと記憶しています。何しろ私はその時大森さんに対して失礼な事を云いました。

ここで繰り返しているのもお恥^はずかしい訳ですが、私はその時、君などの講義をありがたがって聴く生徒がどの国にいるものかと申したのです。もつとも私の主意はその時の大森君には通じていなかったかも知れませんから、この機会を利用して、誤解を防いでおきますが、私どもの書生時代、あなたがたと同年輩^{どうねんぱい}、もしくはもう少し大きくなつた時代、には、今のあなたがたよりよほど横着で、先生の講義などはほとんど聴いた事がないと云つても好いくらいのものでした。

もちろんこれは私や私の周囲のものを本位として述べるのでありますから、けんがい圏外にいたものには通用しないかも知れませんが、どうも今の私からふり返ってみると、そんな気がどこかでするように思われるのです。現にこの私はうわべ上部だけは温順らしく見えながら、けっして講義などに耳をかたむ傾ける性質ではありませんでした。始終怠なまけてのらくらしていました。その記憶をもって、真面目な今の生徒を見ると、どうしても大森君のように、彼らを攻撃こうげきする勇気が出て来ないのです。そう云った意味からして、つい大森さんに対してすまない乱暴を申したのであります。今日は大森君に詫あやまるためにわざわざ出かけた次第ではありませんけれども、ついでだからみんなのいる前で、謝罪しておくのです。

話がついとんだところへ外^それてしまいましたから、再び元へ引き返して筋の立つように云いますと、つまりこうなるのです。

あなたがたは立派な学校に入つて、立派な先生から始終指導を受けていらつしやる、またその方々の専門的もしくは一般^{いっぽんてき}的の講義を毎日聞いていらつしやる。それだのに私みたようなものを、ことさらによそから連れて来て、講演を聴こうとなされるのは、ちようど先刻お話ししたお大名が目黒の秋刀魚^{しやうがん}を賞翫したようなもので、つまりは珍らしいから、一口食つてみようという料簡じゃないかと推察されるのです。實際をいうと、私のようなものよりも、あなたがたが毎日顔を見ていらつしやる常雇^{じやうやと}いの先生のお話の方がよほど有益でもあり、かつまた面白かろうとも思われるのです。たとい私にしたところで、もし

この学校の教授にでもなっていたならば、単に新らしい刺戟しげきのないというだけでも、このくらいの人数が集って私の講演をお聴きになる熱心こうきしんなり好奇心こうきしんなりは起るまいと考えるのですがどんなものでしょう。

私がなぜそんな仮定をするかという、この私は現に昔しこの学習院の教師になろうとした事があるのです。もともと自分で運動した訳でもないのですが、この学校にいた知人が私を推薦すいせんしてくれたのです。その時分の私は卒業する間際まで何をして衣食の道を講じていか知らなかったほどの迂濶うかつ者ものでしたが、さていよいよ世間へ出てみると、懷手ふたしろうでをして待っていたって、下宿料が入って来る訳でもないで、教育者になれるかなれないかの問題はとにかく、どこかへ潜り込もぐこむ必要があったので、ついこの知人のいう通りこの学校へ向けて運動

を開始した次第であります。その時分私の敵が一人ありました。しかし私の知人は私に向ってしきりに大丈夫らしい事をいうので、私の方でも、もう任命されたような気分になって、先生はどんな着物を着なければならぬのかなどと訊きいてみたものです。するとその男はモーニングでなくては教場へ出られないと云いますから、私はまだ事のきまらない先に、モーニングを誂あつらえてしまったのです。そのくせ学習院とはどこにある学校かよく知らなかったのだから、すこぶる変なものです。さていよいよモーニングが出来上できあがつてみると、あに計らんやせつかく頼たのみにしていた学習院の方は落第と事がきまったのです。そうしてもう一人の男が英語教師の空位を充たす事になりました。その人は何という名でしたか今は忘れてしまいました。別段悔くやしくも何と

もなかったからでしょう。何でも米国帰りの人とか聞いていました。

——それで、もしその時にその米国帰りの人が採用されずに、この私
がまぐれ当りに学習院の教師になって、しかも今日まで永続していた
なら、こうした鄭重ていぢようなお招きを受けて、高い所からあなたがたにお話
をする機会もついに来なかったかも知れますまい。それをこの春から
十一月までも待つて聴いて下さろうというのは、とりも直さず、私が
学習院の教師に落第して、あなたがたから目黒の秋刀魚のように珍ら
しがられている証拠しょうこではありませんか。

私はこれから学習院を落第してから以後の私について少々申上もうしあげよ
うと思います。これは今までお話をして来た順序だからという意味よ
りも、今日の講演に必要な部分だからと思って聴いていただきたいの

です。

私は学習院は落第したが、モーニングだけは着ていました。それよりほかに着るべき洋服は持っていなかったのだから仕方ありません。そのモーニングを着てどこへ行ったと思いますか？ その時分は今と違つて就職の途は大変楽でした。どちらを向いても相当の口は開いていたように思われるのです。つまりは人が払底なためだったのでしょうか。私のようなものでも高等学校と、高等師範からほとんど同時に口がかかりました。私は高等学校へ周旋してくれた先輩に半分承諾を与えながら、高等師範の方へも好い加減な挨拶をしてしまったので、事変な具合にもつれてしまいました。もともと私が若いから手ぬかりやら、不行届がちで、とうとう自分に崇つて来たと思えば仕方

がありませんが、弱らせられた事は事実です。私は私の先輩なる高等学校の古参の教授の所へ呼びつけられて、こっちへ来るような事を云いながら、他^{ほか}にも相談をされては、仲に立った私が困ると云って譴責^{けんせき}されました。私は年の若い上に、馬鹿の肝癪持^{かんしゃくもち}ですから、いっそ双方^{そうほう}とも断ってしまったら好いだろうと考えて、その手続きをやり始めたのです。するとある日当時の高等学校長、今ではたしか京都の理科大学長をしている久原さんから、ちよつと学校まで来てくれという通知があつたので、さつそく出かけてみると、その座に高等師範の校長嘉^か納^{のう}治^じ五郎^{ごろう}さんと、それに私を周旋^{しゆせん}してくれた例の先輩がいて、相談はきまつた、こっちに遠慮^{えんりよ}は要^いらないから高等師範の方へ行つたら好かろうという忠告です。私は行^{いき}がかり上^{いや}否^{いな}だとは云えませんが承諾の

旨を答えました。が腹の中では厄介やっかいな事になってしまったと思わざるを得なかったのです。というものは今考えるともったいない話ですが、私は高等師範などをそれほどありがたく思っていなかったのです。嘉納さんに始めて会った時も、そうあなたのように教育者として学生の模範もはんになれというような注文だと、私にはとても勤まりかねるからと逡巡しゆんじゆんしたくらいでした。嘉納さんは上手な人ですから、否そう正直に断わられると、私はますますあなたに来ていただきたくなつたと云つて、私を離さなかったのです。こういう訳で、未熟な私は双方の学校を懸持かけもちしようなどという慾張根性よくばりこんじようは更になかったにかかわらず、関係者に要らざる手数をかけた後、とうとう高等師範の方へ行く事になりました。

しかし教育者として偉えらくなり得るような資格は私に最初から欠けていたのですから、私はどうも窮屈きゆうくつで恐れ入りました。嘉納さんもあなたはあまり正直過ぎて困ると云ったくらいですから、あるいはもっと横着をきめていてもよかったのかも知れません。しかしどうあっても私には不向ふむきな所だとは思われませんでした。奥底のない打ち明けたお話をすると、当時の私はまあ肴屋かしやが菓子家へ手伝いに行ったようなものでした。

一年の後私はとうとう田舎いなかの中学へ赴任ふにんしました。それは伊予いよの松山にある中学校です。あなたがたは松山の中学と聞いてお笑いになるが、おおかた私の書いた「坊ちゃん」でもご覧になったのでしよう。「坊ちゃん」の中に赤シャツという渾名あだなをもっている人があるが、あ

れはいつたい誰の事だと私はその時分よく訊かれたものです。誰の事だつて、当時その中学に文学士と云つたら私一人なのですから、もし「坊ちゃん」の中の人物を一々實在のものと認めるならば、赤シャツはすなわちこういう私の事にならなければならぬので、——はなはだありがたい仕合せと申上げたいような訳になります。

松山にもたった一カ年しかおりませんでした。立つ時に知事が留めてくれましたが、もう先方と内約ができていたので、とうとう断つてそこを立ちました。そうして今度は熊本くまもとの高等学校に腰こしを据すえまして。こういう順序で中学から高等学校、高等学校から大学と順々に私は教えて来た経験をもっています、ただ小学校と女学校だけはまだ足ためしを入れた試ためしがございません。

熊本には大分長くおりました。突然文部省から英国へ留学をしてはどうかという内談のあったのは、熊本へ行ってから何年目になりました。私はその時留学を断ことわろうかと思いました。それは私のよなものが、何の目的ももたずに、外国へ行ったからと云って、別に国家のために役に立つ訳もなからうと考えたからです。しかるに文部省の内意を取とり次いでくれた教頭が、それは先方の見込みなのだから、君の方で自分を評価する必要はない、ともかくも行った方が好かうと云うので、私も絶対に反抗する理由もないから、命令通り英国へ行きました。しかし果はたせるかな何もする事がないのです。

それを説明するためには、それまでの私というものを一応お話ししなければならん事になります。そのお話がすなわち今日の講演の一部

分を構成する訳なのですからそのつもりでお聞きを願います。

私は大学で英文学という専門をやりました。その英文学というものはどんなものかとお尋ね^{たず}になるかも知れませんが、それを三年専攻した私にも何が何だかまあ夢中^{むちゆう}だったのです。その頃はジクソンという人が教師でした。私はその先生の前で詩を読ませられたり文章を読ませられたり、作文を作って、冠詞^{かんし}が落ちていると云って叱^{しか}られたり、発音が間違っていると怒^{おこ}られたりしました。試験にはウォーズウオースは何年に生れて何年に死んだとか、シェクスピアのフォリオは幾通りあるかとか、あるいはスコットの書いた作物を年代順に並^{なら}べてみるとかいう問題ばかり出たのです。年の若いあなた方にもほぼ想像ができるでしょう、はたしてこれが英文学かどうだかという事が。英文学

はしばらく措^おいて第一文学とはどういうものか、これではどうてい
解^{わか}るはずがありません。それなら自力でそれを窮^{きわ}め得るかと言うと、
まあ盲目^{めくら}の垣^{かき}覗^{のぞ}きといったようなもので、図書館に入つて、どこをど
ううついても手掛^{てがかり}がないのです。これは自力の足りないばかりでな
くその道に關した書物も乏^{とぼ}しかったのだらうと思います。とにかく三
年勉強して、ついに文学は解らずじまいだったのです。私の煩悶^{はんもん}は第
一ここに根ざしていたと申し上げても差支ないでしょう。

私はそんなあやふやな態度で世の中へ出てとうとう教師になつたと
いうより教師にされてしまったのです。幸に語学^{あや}の方は怪^{あや}しいにせ
よ、どうかこうかお茶を濁^{にご}して行かれるから、その日その日はまあ無
事に済んでいましたが、腹の中は常に空虚^{くうきよ}でした。空虚ならいつそ思

い切りがよかったかも知れませんが、何だか不愉快な煮え切らない漠然たるものが、至る所に潜んでいようで堪まらないのです。しかも一方では自分の職業としている教師というものに少しの興味もち得ないのです。教育者であるという素因の私に欠乏している事は始めから知っていました。ただ教場で英語を教える事がすでに面倒なのだから仕方ありません。私は始終中腰で隙があつたら、自分の本領へ飛び移ろう飛び移ろうとのみ思っていたのですが、さてその本領というのがあるようで、無いようで、どこを向いても、思い切つてやつと飛び移れないのです。

私はこの世に生れた以上何かしなければならん、といって何をして好いか少しも見当がつかない。私はちょうど霧の中に閉じ込められた

孤独こどくの人間のように立ち竦すくんでしまったのです。そうしてどこからか一筋の日光が射さして来ないかしらんという希望よりも、こちらから探照灯を用いてたった一条ひとすじで好いから先まで明らかに見たいという気がしました。ところが不幸にしてどちらの方角を眺めてもぼんやりしているのです。ぼうつとしていのです。あたかも囊ふくろの中に詰つまめられて出る事のできない人のような気持がするのです。私は私の手にただ一本の錐きりさえあればどこか一力所突き破って見せるのだがと、焦燥あせり抜ぬいたのですが、あいにくその錐は人から与えられる事もなく、また自分で発見する訳にも行かず、ただ腹の底ではこの先自分はどのようなだろうと思つて、人知れず陰鬱いんうつな日を送つたのであります。

私はこうした不安を抱いだいて大学を卒業し、同じ不安を連れて松山か

ら熊本へ引越^{ひっこ}し、また同様の不安を胸の底に^{たた}畳んでついに外国まで渡^{わた}ったのであります。しかしいったん外国へ留学する以上は多少の責任を新たに自覚させられるにはきまっています。それで私はできるだけ骨を折って何かしようと努力しました。しかしどんな本を読んでも依然^{いぜん}として自分は囊の中から出る訳に参りません。この囊を突き破る^{ロンドン}雖は倫敦中探して歩いても見つかりそうになかったのです。私は下宿の一間の中で考えました。つまらないと思いました。いくら書物を読んでも腹の足^{たし}にはならないのだと諦^{あきら}めました。同時に何のために書物を読むのか自分でもその意味が解らなくなつて来ました。

この時私は始めて文学とはどんなものであるか、その概念^{がいねん}を根本的に自力で作^さり上げるよりほかに、私を救う途はないのだと悟^{さと}つたので

す。今までは全く他人本位で、根のない萍うきぐさのように、そこいらをでたらめに漂ただよっていたから、駄目だめであつたという事にようやく気がついたのです。私のここに他人本位というのは、自分の酒を人に飲んでもらって、後からその品評を聴いて、それを理が非でもそうだとしてみまういわゆる人真似ひとまねを指すのです。一口にこう云つてしまえば、馬鹿らしく聞こえるから、誰もそんな人真似をする訳がないと不審ふしんがられるかも知れませんが、事實はけつしてそうではないのです。近頃流行はやるベルグソンでもオイケンでもみんな向うむこの人がとやかきうので日本人もその尻馬しりうまに乗って騒さわぐのです。ましてその頃は西洋人のいう事だと云えば何でもかでも盲従もうじゆうして威張いばつたものです。だからむやみに片仮名を並べて人に吹聴ふいちようして得意がった男が比々みなこれ皆是なりと云いたい

くらいごろごろしていました。他の悪口ではありません。こういう私が現にそれだったのです。たとえばある西洋人が甲こうという同じ西洋人の作物を評したのを読んだとすると、その評の当否はまるで考えずに、自分の腑ふに落ちようが落ちまいが、むやみにその評を触ふれ散らかすのです。つまり鵜吞うのみと云つてもよし、また機械的の知識と云つてもよし、とうていわが所有とも血とも肉とも云われない、よそよそしいものを我物顔わがものがおにしゃべって歩くのです。しかるに時代が時代だから、またみんながそれを賞ほめるのです。

けれどもいくら人に賞められたって、元々人の借着をして威張くじやくっているのだから、内心は不安です。手もなく孔雀の羽根を身に着けて威張ふかっているようなものですから。それでもう少し浮華しじつを去って摯実しじつに

つかなければ、自分の腹の中はいつまで経^たったって安心はできないという事に気がつき出したのです。

たとえば西洋人がこれは立派な詩だとか、口調が大変好いとか云つても、それはその西洋人の見るところで、私の参考にならん事はないにしても、私にそう思えなければ、とうてい受^{うけうり}売をすべきはずのものではないのです。私が独立した一個の日本人であつて、けつして英国人の奴婢^{どひ}でない以上はこれくらいの見識は国民の一員として具^{そな}えていなければならぬ上に、世界に共通な正直という徳義を重んずる点から見ても、私は私の意見を曲げてはならないのです。

しかし私は英文学を専攻する。その本場の批評家のいうところと私の考^{かんがえ}と矛盾^{むじゆん}してはどうも普通^{ふつう}の場合気が引ける事になる。そこでこう

した矛盾がはたしてどこから出るかという事を考えなければならなくなる。風俗、人情、習慣、さかのぼ溯つては国民の性格皆この矛盾の原因になつてゐるに相違ない。それを、普通の学者は単に文学と科学とを混同して、甲の国民に氣に入るものはきつと乙の国民の賞讃を得るにきまつてゐる、そうした必然性が含まれてゐると誤認してかかる。そこが間違つてゐると云わなければならない。たといこの矛盾を融和ゆうわする事が不可能にしても、それを説明する事はできるはずだ。そうして単にその説明だけでも日本の文壇には一道の光明を投げ与あたえる事ができる。——こう私はその時始めて悟つたのでした。はなはだ遅おそまきの話で慚愧ざんきの至いたりでありますけれども、事実だから偽いつわらないところを申し上げるのです。

私はそれから文芸に対する自己の立脚地りつきやくちを堅かためるため、堅めるとい
うより新らしく建設するために、文芸とは全く縁えんのない書物を読み始
めました。一口でいうと、自己本位という四字をようやく考えて、そ
の自己本位を立証するために、科学的な研究やら哲学的てつがくてきの思索しさくに耽ふけ
出したのであります。今は時勢が違いますから、この辺の事は多少頭
のある人にはよく解せられているはずですが、その頃は私が幼稚ようちな上
に、世間がまだそれほど進んでいなかったので、私のやり方は實際や
むをえなかったのです。

私はこの自己本位という言葉にぎを自分の手に握にぎってから大變強くなり
ました。彼ら何者かれぞやと感慨きがが出ました。今まで茫然ぼうぜんと自失さしずしていた
私に、ここに立って、この道からこう行かなければならないと指図さしずを

してくれたものは実にこの自我本位の四字なのであります。

自白すれば私はその四字から新たに出立したのであります。そうして今のようにただ人の尻馬にばかり乗って空騒ぎをしているようでははなはだ心元ない事だから、そう西洋人ぶらないでも好いという動かすべからざる理由を立派に彼らの前に投げ出してみたら、自分もさぞ愉快だろう、人もさぞ喜ぶだろうと思つて、著書その他の手段によつて、それを成就するのを私の生涯しょうがいの事業としようと考えたのです。

その時私の不安は全く消えました。私は軽快な心をもつて陰鬱いんうつな倫敦を眺めたのです。比喻ひゆで申すと、私は多年の間懊惱おうのうした結果ようやく自分の鶴嘴つるはしをがちりと鉋脈ほに掘り当てたような気がしたのです。なお繰り返かえしていうと、今まで霧の中に閉じ込まれたものが、ある角度

の方向で、明らかに自分の進んで行くべき道を教えられた事になるのです。

かく私が啓発けいはつされた時は、もう留学してから、一年以上経過していたのです。それでとても外国では私の事業を仕上しあげる訳に行かない、とにかくできるだけ材料を纏めて、本国へ立ち帰った後、立派に始末をつけようという気になりました。すなわち外国へ行った時よりも帰って来た時の方が、偶然ぐうぜんながらある力を得た事になるのです。

ところが帰るや否や私は衣食のために奔走ほんそうする義務がさつそく起りました。私は高等学校へも出ました。大学へも出ました。後では金が足りないのです、私立学校も一軒稼けんかせぎました。その上私は神経衰弱しんけいすいじやくに罹りました。最後に下らない創作などを雑誌に載のせなければならぬ仕し

儀に陥おちいりました。いろいろの事情で、私は私の企くわだてた事業を半途で中止してしまいました。私の著あらわした文学論はその記念というよりもむしろ失敗の亡骸なきがらです。しかも畸形児きけいじの亡骸なきがらです。あるいは立派に建設されないうちに地震じしんで倒たおされた未成市街の廢墟はいきよのようなものです。

しかしながら自己本位というその時得た私の考は依然としてつづいています。否年を経るに従ってだんだん強くなります。著作的事業としては、失敗に終りましたけれども、その時確かに握った自己が主で、他は賓ひんであるという信念は、今日の私に非常の自信と安心を与えてくれました。私はその引続きとして、今日なお生きていられるような心持がします。実はこうした高い壇の上に立つて、諸君を相手に講演をするのもやはりその力のお蔭かげかも知れません。

以上はただ私の経験だけをざっとお話したのでありますけれども、そのお話しを致した意味は全くあなたがたのご参考になりはしまいかという老婆心ろうばしんからなのであります。あなたがたはこれからみんな学校を去って、世の中へお出かけになる。それにはまだ大分時間のかかる方もございましたように、またはおっつけ実社界に活動なさる方もあるでしょうが、いずれも私の一度経過した煩悶はんもん（たとい種類は違つても）を繰返しくりかえしがちなものじやなかろうかと推察されるのです。私のようにどこか突き抜けたくつても突き抜ける訳にも行かず、何か掴みつかたくつても薬缶頭やかんあたまを掴むようにつるつるして焦燥じれつたくなったりする人が多分あるだろうと思うのです。もしあなたがたのうちですでに自力で切り開いた道を持っている方は例外であり、また他の後ひとに従つ

て、それで満足して、在来の古い道を進んで行く人も悪いとはけつして申しませんが、（自己に安心と自信がしつかり附随ふずいしているならば、）しかしもしそうでないとしたならば、どうしても、一つ自分の鶴嘴で掘り当てるところまで進んで行かなくなつてはいけないでしよう。いけないというのは、もし掘りあてる事ができなかつたなら、その人は生涯不愉快で、始終中腰になつて世の中にまごまごしていなければならぬからです。私のこの点を力説するのは全くそのためで、何も私を模範もはんになさいという意味ではけつしてないのです。私のようになつまらないものでも、自分で自分が道をつけつつ進み得たという自觉があれば、あなた方から見てその道がいかに下らないにせよ、それはあなたがたの批評と観察で、私には寸毫すんごうの損害がないのです。私自

身はそれで満足するつもりであります。しかし私自身がそれがため、自信と安心をもっているからといって、同じ径路けいろがあなたがたの模範になるとはけっして思っていないのですから、誤解してはいけません。

それはとにかく、私の経験したような煩悶があなたがたの場合にもしばしば起るに違いないと私は鑑定かんていしているのですが、どうでしょうか。もしそうだとすると、何かに打ち当るまで行くという事は、学問をする人、教育を受ける人が、生涯の仕事としても、あるいは十年二十年の仕事としても、必要じゃないでしょうか。ああここにおれの進むべき道があった！　ようやく掘り当てた！　こういう感投詞を心の底から叫さけび出される時、あなたがたは始めて心を安んずる事ができる

のでしょう。容易に打ち壊こわされない自信が、その叫び声とともにむくむく首を擡もたげて来るのではありませんか。すでにその域に達している方も多数のうちにはあるかも知れませんが、もし途中で霧もやか靄もやのために懊惱ぼなうしていられる方があれば、どんな犠牲ぎせいを払はらつても、ああここだという掘当ほりあてるところまで行ったらよろしかろうと思うのです。必ずしも国家のためばかりだからというわけではありません。またあなた方のご家族のために申し上げる次第でもありません。あなたがた自身の幸福のために、それが絶対に必要じゃないかと思うから申上げるのです。もし私の通ったような道を通り過ぎた後なら致し方もないが、もしどこかにこだわこたわりがあるなら、それを踏潰ふみつぶすまで進まなければ駄目ですよ。——もつとも進んだってどう進んで好いか解らないの

だから、何かにぶつかる所まで行くよりほかに仕方がないのです。私は忠告がましい事をあなたがたに強いる気はまるでありませんが、それが将来あなたがたの幸福の一つになるかも知れないと思うと黙^{だま}っていられなくなるのです。腹の中の煮え切らない、徹^{てつてい}底しない、ああでもありこうでもあるというような海^{なまこ}鼠のような精神を抱^{いだ}いてぼんやりしては、自分が不愉快ではないか知らんと思うからいうのです。不愉快でないとおっしゃればそれまでです、またそんな不愉快は通り越^こしているとおっしゃれば、それも結構であります。願^{ねがわ}くは通り越してありたいと私は祈^{いの}るのであります。しかしこの私は学校を出て三十以上まで通り越せなかったのです。その苦痛は無論鈍^{どん}痛^{つう}ではありませんでしたが、年々歳^{さいさい}々感^{かん}ずる痛^{いたみ}には相違^{さいたい}なかったのです。だからもし

私のような病気に罹った人が、もしこの中にあるならば、どうぞ勇猛（ゆうもう）にお進みにならん事を希望してやまないのです。もしそこまで行ければ、ここにおれの尻を落ちつける場所があつたのだという事実をご発見になって、生涯の安心と自信を握る事ができるようになると思うから申し上げるのです。

今まで申し上げた事はこの講演の第一篇（ぺん）に相当するものですが、私はこれからその第二篇に移ろうかと考えます。学習院という学校は社会的地位の好い人が這入る学校のように世間から見倣（みな）されております。そうしてそれがおそらく事実なのでしょう。もし私の推察通り大した貧民はここへ来ないで、むしろ上流社会の子弟ばかりが集まっているとすれば、向後あなたがたに附随してくるもののうちで第一番に

挙げなければならぬのは権力であります。換言^{かんげん}すると、あなた方が世間へ出れば、貧民が世の中に立った時よりも余計権力が使えるという事なのです。前申した、仕事をして何かに掘りあてるまで進んで行くという事は、つまりあなた方の幸福のため安心のためには相違ありませんが、なぜそれが幸福と安心とをもたらすかというと、あなた方のもって生れた個性がそこにぶつかって始めて腰がすわるからでしょう。そうしてそこに尻を落ちつけてだんだん前の方へ進んで行くとその個性がますます発展して行くからでしょう。ああここにおれの安住の地位があつたと、あなた方の仕事とあなたがたの個性が、じっくり合った時に、始めて云い得るのですよう。

これと同じような意味で、今申し上げた権力というものを吟味^{ぎんみ}して

みると、権力とは先刻さつきお話しした自分の個性を他人の頭の上に無理矢理にお押しつける道具なのです。道具だと断然云い切ってわるければ、そんな道具に使い得る利器なのです。

権力に次ぐものは金力です。これもあなたがたは貧民よりも余計に所有しておられるに相違ない。この金力を同じくそうした意味から眺めると、これは個性を拡張するために、他人の上に誘惑ゆうわくの道具として使用し得る至極重宝なものになるのです。

してみると権力と金力とは自分の個性を貧乏人びんぼうにんより余計に、他人の上に押し被かぶせるとか、または他人をその方面に誘おびき寄せるとかいう点において、大変便宜べんぎな道具だと云わなければなりません。こういう力があるから、偉いようであり、その実非常に危険なのです。先刻申し

た個性はおもに学問とか文芸とか趣味とかについて自己の落ちつくべき所まで行つて始めて發展するようにお話し致したのですが、実をいうとその応用ははなはだ広いもので、單に学芸だけにはとどまらないのです。私の知っている兄弟で、弟の方は家に引込んで書物などを読む事が好きなのに引き易えて、兄はまた釣道楽に憂身をやつしているのがあります。するとこの兄が自分の弟の引込思案でただ家にばかり引籠っているのを非常に忌まわしいもののように考えるのです。必竟は釣をしないからああいう風に厭世的になるのだと合点して、むやみに弟を釣に引張り出そうとするのです。弟はまたそれが不愉快でたまらないのだけれども、兄が高圧的に釣竿を担がしたり、魚籃を提げさせたりして、釣堀へ随行を命ずるものだから、まあ目を瞑つてくつ

いて行って、気味の悪い鮒ふななどを釣っていやいや帰ってくるのです。それがために兄の計画通り弟の性質が直ったかという、けっしてそうではない、ますますこの釣というものに対して反抗心を起してくるようになります。つまり釣と兄の性質とはぴたりと合ってその間に何の隙間もないのでしようが、それはいわゆる兄の個性で、弟とはまるで交渉こうしょうがないのです。これはもとより金力の例ではありません、権力の他を威圧する説明になるのです。兄の個性が弟を圧迫あっぱくして無理に魚を釣らせるのですから。もつともある場合には、——例えば授業を受ける時とか、兵隊になった時とか、また寄宿舎でも軍隊生活を主位におくとか——すべてそう云った場合には多少この高圧的手段は免まぬかれますまい。しかし私はおもにあなたがたが一本立いっぽんだちになって世間へ出た

時の事を云っているのだからそのつもりで聴いて下さらなくては困ります。

そこで前申した通り自分が好いと思つた事、好きな事、自分と性の合う事、幸にそこにぶつかつて自分の個性を發展させて行くうちに、自他の區別を忘れて、どうかあいつもおれの仲間^ひに引き摺^ずり込んでやろうという気になる。その時権力があると前云つた兄弟のような変な關係が出来上るし、また金力があると、それをふりまいて、他^{ひと}を自分のようなものに仕立上げようとする。すなわち金を誘惑の道具として、その誘惑の力で他を自分に氣に入るように變化させようとする。どっちにしても非常な危険が起るのです。

それで私は常からこう考えています。第一にあなたがたは自分の個

性が発展できるような場所に尻を落ちつけべく、自分とぴたりと合った仕事を発見するまで邁進まいしんしなければ一生の不幸であると。しかし自分がそれだけの個性を尊重し得るように、社会から許されるならば、他人に対してもその個性を認めて、彼らの傾向けいこうを尊重するのが理の当然になって来るでしょう。それが必要でかつ正しい事としか私には見えません。自分は天性右を向いているから、あいつが左を向いているのは怪けしからんというのは不都合じゃないかと思うのです。もっとも複雑な分子の寄って出来上った善悪とか邪正じゃせいとかいう問題になると、少々込み入った解剖かいぼうの力を借りなければ何とも申されませんが、そうした問題の關係して来ない場合もしくは關係しても面倒めんどうでない場合には、自分が他ひとから自由を享有きようゆうしている限り、他にも同程度の自由を与

えて、同等に取り扱あつかわなければならん事と信ずるよりほかに仕方がないのです。

近頃自我とか自覚とか唱えていくら自分の勝手な真似をしても構わないという符ふ徴ちように使うようですが、その中にははなはだ怪しいのがたくさんあります。彼らは自分の自我をあくまで尊重するような事を云いながら、他人の自我に至っては毫も認めていないのです。いやしくも公平の眼を具し正義の観念をもつ以上は、自分の幸福のために自分の個性を発展して行くと同時に、その自由を他にも与えなければなりませんだと私は信じて疑わないのです。我々は他が自己の幸福のために、己おのれの個性を勝手に発展するのを、相当の理由なくして妨害ぼうがいしてはならないのであります。私はなぜここに妨害という字を使うかとい

うと、あなたがたは正しく妨害し得る地位に将来立つ人が多いからです。あなたがたのうちには権力を用い得る人があり、また金力を用い得る人がたくさんあるからです。

元来をいうなら、義務の附着しておらない権力というものが世の中にあるはずがないのです。私がこうやって、高い壇の上からあなた方を見下して、一時間なり二時間なり私の云う事を静肅せいしゆくに聴いていた、だく権利を保留する以上、私の方でもあなた方を静肅にさせるだけの説を述べなければすまないはずだと思います。よし平凡へいぼんな講演をするにしても、私の態度なり様子なりが、あなたがたをして礼を正さしむるだけの立派さをもっていなければならんはずのものであります。ただ私はお客である、あなたがたは主人である、だからおとなしくしな

くてはならない、とこう云おうとすれば云われない事もないでしょうが、それは上面うわつらの礼式にとどまる事で、精神には何の関係もない云わば因襲いんしゅうといったようなものですから、てんで議論にはならないのです。別の例を挙げてみますと、あなたがたは教場で時々先生から叱られる事があるでしょう。しかし叱りつ放しの先生がもし世の中にあるとすれば、その先生は無論授業をする資格のない人です。叱る代りには骨を折って教えてくれるにきまっています。叱る権利をもつ先生はすなわち教える義務をももっているはずなのですから。先生は規律をただすため、秩序ちつじよを保つために与えられた権利を十分に使うでしょう。その代りその権利と引き離す事のできない義務も尽つくさなければ、教師の職を勤め終おせる訳に行きますまい。

金力についても同じ事であります。私の考かんがえによると、責任を解しない金力家は、世の中にあつてならないものなのです。その訳を一口にお話しするようになります。金銭というものは至極重宝なもので、何へでも自由自在に融通ゆうづうが利く。たとえば今私がここで、相場をして十万円儲もうけたとすると、その十万円の家屋を立てる事もできるし、書籍しよせきを買う事もできるし、または花柳社界かりゆうを賑にぎわす事もできるし、つまりどんな形にでも變つて行く事ができます。そのうちでも人間の精神を買う手段に使用できるのだから恐ろしいではありませんか。すなわちそれをふりまいて、人間の徳義心を買ひ占しめる、すなわちその人の魂たましいを墮落だらくさせる道具とするのです。相場で儲けた金が徳義的倫理的に大きな威力をもつて働らき得るとすれば、どうしても不都合な応用と云

わなければならぬかと思われます。思われるのですけれども、實際その通りに金が活動する以上は致し方がない。ただ金を所有している人が、相当の徳義心をもつて、それを道義上害のないように使いこなすよりほかに、人心の腐敗ふはいを防ぐ道はなくなってしまうのです。それで私は金力には必ず責任がついて廻らなければならぬといいたくありません。自分は今これだけの富の所有者であるが、それをこういう方面にこう使えば、こういう結果になるし、ああいう社会にああ用いればああいう影響えいきようがあると呑み込むだけの見識を養成するばかりでなく、その見識に応じて、責任をもつてわが富を所置しなければ、世の中にすまないと云うのです。いな自分自身にもすむまいというのです。

今までの論旨ろんしをかい摘つまんでみると、第一に自己の個性の発展を仕し遂とげようと思うならば、同時に他人の個性も尊重しなければならぬという事。第二に自己の所有している権力を使用しようと思うならば、それに附随している義務というものを心得なければならぬという事。第三に自己の金力を示そうと願うなら、それに伴ともなう責任を重おもじなければならぬという事。つまりこの三力条に帰着するのであります。

これをほかの言葉で言い直すと、いやしくも倫理的に、ある程度の修養を積んだ人でなければ、個性を發展する価値もなし、権力を使う価値もなし、また金力を使う価値もないという事になるのです。それをもう一遍ぺん云い換かえると、この三者を自由に享うけ楽しむためには、そ

の三つのものの背後にあるべき人格の支配を受ける必要が起つて来る
というのです。もし人格のないものがむやみに個性を發展しようとする
と、他^{ひと}を妨害する、権力を用いようとすると、濫用^{らんよう}に流れる、金力
を使おうとすれば、社会の腐敗をもたらす。ずいぶん危険な現象を呈^{てい}
するに至るのです。そうしてこの三つのものは、あなたがたが将来に
おいて最も接近しやすいものであるから、あなたがたはどうしても人
格のある立派な人間になっておかなくてはいけないだろうと思いま
す。

話が少し横へそれますが、ご存じの通り英吉利^{イギリス}という国は大変自由
を尊ぶ国であります。それほど自由を愛する国でありながら、また英
吉利ほど秩序の調った国はありません。実をいうと私は英吉利を好か

ないのです。嫌いきらではあるが事実だから仕方なしに申し上げます。あれほど自由でそうしてあれほど秩序の行き届いた国は恐らく世界中にないでしょう。日本などはとうてい比較ひかくにもなりません。しかし彼らはただ自由なのではありません。自分の自由を愛するとともに他の自由を尊敬するように、小供の時分から社会的教育をちゃんと受けているのです。だから彼らの自由の背後にはきつと義務という觀念が伴っています。England expects every man to do his duty とつた有名なネルソンの言葉はけっして当座限りの意味のものではないのです。彼らの自由と表裏して発達して来た深い根柢こんていをもった思想ちがに違ちがないのです。

彼らは不平があるとよく示威運動をやります。しかし政府はけっし

て干渉がましい事をしません。黙って放っておくのです。その代り示威運動をやる方でもちゃんと心得ていて、むやみに政府の迷惑になるような乱暴は働かないのです。近頃女権拡張論者と云ったようなものがむやみに狼藉をするように新聞などに見えています。あれはまあ例外です。例外にしては数が多過ぎると云われればそれまでですが、どうも例外と見るよりほかに仕方がないようです。嫁に行かれないとか、職業が見つからないとか、または昔時から養成された、女を尊敬するという気風につけ込むのか、何しろあれは英国人の平生の態度ではないようです。名画を破る、監獄で断食して獄丁を困らせる、議会のベンチへ身体を縛りつけておいて、わざわざ騒々しく叫び立てる。これは意外の現象ですが、ことによると女は何をしても男の方で遠慮

するから構わないという意味でやっているのかも分りません。しかしまあどうい理由にしても変則らしい気がします。一般の英国氣質というものは、今お話しした通り義務の觀念を離れない程度において自由を愛しているようです。

それで私は何も英国を手本にするという意味ではないのですけれども、要するに義務心を持っていない自由は本当の自由ではないと考えます。と云うものは、そうしたわがままな自由はけっして社会に存在し得ないからであります。よし存在してもすぐ他から排斥はいせきされ踏ふみ潰つぶされるにきまつているからです。私はあなたがたが自由にあらん事を切望するものであります。同時にあなたがたが義務というものを納得せられん事を願ってやまないであります。こういう意味において、

私は個人主義だと公言して憚^{はば}らないつもりです。

この個人主義という意味に誤解があつてはいけません。ことにあなたがたのような若い人に対して誤解を吹^ふき込^こんでは私がすみませんから、その辺はよくご注意を願つておきます。時間が逼^おつてゐるからなるべく単簡に説明致しますが、個人の自由は先刻お話した個性の發展上極めて必要なものであつて、その個性の發展がまたあなたがたの幸福に非常な關係を及^{およ}ぼすのだから、どうしても他に影響のない限り、僕は左を向く、君は右を向いても差支ないくらいの自由は、自分でも把持^{はじ}し、他人にも附与^{ふよ}しなくてはなるまいかと考えられます。それがとりも直さず私のいう個人主義なのです。金力権力の点においてもその通りで、俺^{おれ}の好かないやつだから畳んでしまえとか、氣に喰^くわ

ない者だからやつつけてしまえとか、悪い事もないのに、ただそれらを濫用らんようしたらどうでしょう。人間の個性はそれで全く破壊はかいされると同時に、人間の不幸もそこから起らなければなりません。たとえば私が何も不都合を働らかないのに、単に政府に気に入らないからと云つて、警視総監けいしそうかんが巡查じゅんさに私の家を取り巻かせたらどんなものでしょう。警視総監にそれだけの権力はあるかも知れないが、徳義はそういう権力の使用を彼に許さないのです。または三井とか岩崎とかいう豪商ごうしょうが、私を嫌うというだけの意味で、私の家の召使めしつかいを買収して事ごとくに私に反抗させたなら、これまたどんなものでしょう。もし彼らの金力の背後に人格というものが多少でもあるならば、彼らはけっしてそんな無法を働らく気にはなれないのであります。

こうした弊害^{へいがい}はみな道義上の個人主義を理解し得ないから起るの
で、自分だけを、権力なり金力なりで、一般に推し広めようとするわ
がままにほかならんのであります。だから個人主義、私のここに述べ
る個人主義というものは、けっして俗人の考えているように国家に危
険を及ぼすものでも何でもないので、他の存在を尊敬すると同時に自
分の存在を尊敬するというのが私の解釈なのですから、立派な主義だ
ろうと私は考えているのです。

もつと解りやすく云えば、党派心がなくって理非がある主義なので
す。朋党^{ほうとう}を結び団隊を作って、権力や金力のために盲動^{もうどう}しないとい
う事なのです。それだからその裏面には人に知られない淋しさ^{さび}も潜んで
いるのです。すでに党派でない以上、我は我の行くべき道を勝手に行

くだけで、そうしてこれと同時に、他人の行くべき道を妨げないのだから、ある時ある場合には人間がばらばらにならなければなりません。そこが淋しいのです。私がかつて朝日新聞の文芸欄ぶんげいらんを担任していた頃、だれであったか、三宅雪嶺みやけせつれいさんの悪口を書いた事がありました。もちろん人身攻撃ではないので、ただ批評に過ぎないのです。しかもそれがたった二三行あったのです。出たのはいつごろでしたか、私は担任者であったけれども病気をしたからあるいはその病氣中かも知れず、または病氣中であつて、私が出して好いと認定したのかも知れません。とにかくその批評が朝日の文芸欄に載ったのです。すると「日本及び日本人」の連中が怒りました。私の所へ直接にはかけ合
わなかつたけれども、当時私の下働きをしていた男とりけしに取消を申し込ん

で来ました。それが本人からではないのです。雪嶺さんの子分——子分というとは何か博奕打ばくちうちのようでおかしいが、——まあ同人といったようなものでしょう、どうしても取り消せというのです。それが事実の問題ならもつともですけれども、批評なんだから仕方がないじゃありませんか。私の方ではこちらの自由だというよりほかに途はないのです。しかもそうした取消を申し込んだ「日本及び日本人」の一部では毎号私の悪口を書いている人があるのだからなおのこと人を驚ろかせるのです。私は直接談判はしませんでしたけれども、その話を間接に聞いた時、変な心持こころもちがしました。というのは、私の方は個人主義でやっているのに反して、向うは党派主義で活動しているらしく思われたからです。当時私は私の作物をわるく評したもののさえ、自分の担任

している文芸欄へ載せたくらいですから、彼らのいわゆる同人なるものが、一度に雪嶺さんに対する評語が気に入らないと云って怒ったのを、驚ろきもしたし、また変にも感じました。失礼ながら時代後れだとも思いました。封建時代ほうけんの人間の団隊のようにも考えました。しかしそう考えた私はついに一種の淋しさを脱却だつきやくする訳に行かなかったのです。私は意見の相違はいかに親しい間柄あいだがらでもどうする事もできな
と思っていましたから、私の家よくあつに出入りをする若い人達に助言はしても、その人々の意見の発表に抑圧を加えるような事は、他に重大な理由ひとのない限り、けっしてやった事がないのです。私は他の存在ひとをそれほどに認めている、すなわち他にそれだけの自由を与えているのです。だから向うの気が進まないのに、いくら私が汚辱を感じずるような

事があつても、けつして助力は頼めないのです。そこが個人主義の淋しさです。個人主義は人を目標として向背を決する前に、こうはいまず理非を明らめて、去就を定めるのだから、ある場合にはたった一人ぼっちになつて、淋しい心持がするのです。それはそのはずです。まきざつぼう槓雜木でも束たばになつていれば心丈夫こころじょうぶですから。

それからもう一つ誤解を防ぐために一言しておきたいのですが、何だか個人主義というところと国家主義の反対で、それを打ち壊すように取られますが、そんな理窟りくつの立たない漫然まんぜんとしたものではないのです。いったい何々主義という事は私のあまり好まないところで、人間がそう一つ主義に片づけられるものではあるまいとは思いますが、説明のためですから、ここにはやむをえず、主義という文字の下にい

ろいろの事を申し上げます。ある人は今の日本はどうしても国家主義でなければ立ち行かないように云いふらしまたそう考えています。しかも個人主義なるものを蹂躪じゅうりんしなければ国家が亡ほろびるような事を唱道するものも少なくはありません。けれどもそんな馬鹿気たはずは決してありません。事実私共は国家主義でもあり、世界主義でもあり、同時にまた個人主義でもあるのであります。

個人の幸福の基礎きそとなるべき個人主義は個人の自由がその内容になつてゐるには相違ありませんが、各人の享有きやうゆうするその自由というのは国家の安危に従つて、寒暖計のように上ったり下ったりするのです。これは理論というよりもむしろ事実から出る理論と云つた方が好いかも知れません、つまり自然の状態がそうなつて来るのです。国家

が危くなれば個人の自由が狭められ、国家が泰平たいへいの時には個人の自由が膨脹ぼうちようして来る、それが当然の話です。いやしくも人格のある以上、それを踏み違えて、国家の亡びるか亡びないかという場合に、疇違かんちがいをしてただむやみに個性の発展ばかりめがけている人はないはずで
す。私のいう個人主義のうちには、火事が済んでもまだ火事頭巾ずきんが必
要だと云つて、用もないのに窮屈きうくつがる人に対する忠告も含まれている
とを考えて下さい。また例になります、昔し私が高等学校にいた時
分、ある会を創設したものがありません。その名も主意くわも詳しい事は
忘れてしまいましたが、何しろそれは国家主義を標榜ひょうぼうしたやかましい
会でした。もちろん悪い会でも何でもありません。当時の校長の木下
広次さんなどは大分肩を入れていた様子でした。その会員はみんな胸

にめ・だ・る・を・下・げ・て・い・ま・し・た・。私・は・め・だ・る・だ・け・は・ご・免・蒙・り・ま・し・た・が・、そ
れ・で・も・会・員・に・は・さ・れ・た・の・で・す・。無・論・発・起・人・で・な・い・か・ら・、ず・い・ぶ・ん・異・存
も・あ・つ・た・の・で・す・が・、ま・あ・入・つ・て・も・差・支・な・か・ろ・う・と・い・う・主・意・か・ら・入・会・し
ま・し・た・。と・こ・ろ・が・そ・の・発・会・式・が・広・い・講・堂・で・行・な・わ・れ・た・時・に・、何・か・の・機
で・し・た・ろ・う・、一・人・の・会・員・が・壇・上・に・立・つ・て・演・説・め・い・た・事・を・や・り・ま・し・た・。
と・こ・ろ・が・会・員・で・は・あ・つ・た・け・れ・ど・も・私・の・意・見・に・は・大・分・反・対・の・と・こ・ろ・も
あ・つ・た・の・で・、私・は・そ・の・前・ず・い・ぶ・ん・そ・の・会・の・主・意・を・攻・撃・し・て・い・た・よ・う・に
記・憶・し・て・い・ま・す・。し・か・る・に・い・い・よ・発・会・式・と・な・つ・て・、今・申・し・た・男・の・演
説・を・聴・い・て・み・る・と・、全・く・私・の・説・の・反・駁・に・過・ぎ・な・い・の・で・す・。故・意・だ・か・偶
然・だ・か・解・り・ま・せ・ん・け・れ・ど・も・勢・い・私・は・そ・れ・に・対・し・て・答・弁・の・必・要・が・出・て・来
ま・し・た・。私・は・仕・方・な・し・に・、そ・の・人・の・あ・と・か・ら・演・壇・に・上・り・ま・し・た・。当・時

の私の態度なり行儀なりははなはだ見苦しいものだと思いますが、それでも簡潔に云う事だけは云って退^のけました。ではその時何と云ったかとお尋ねになるかも知れませんが、それはすこぶる簡単なのです。私はこう云いました。——国家は大切かも知れないが、そう朝から晩まで国家国家と云ってあたかも国家に取りつかれたような真似はどうてい我々にできる話でない。常住坐臥^{じょうじゅうざが}国家の事以外を考えてならないという人はあるかも知れないが、そう間断なく一つ事を考えている人は事実あり得ない。豆腐屋^{とうふ}が豆腐を売つてあるのは、けっして国家のために売つて歩くのではない。根本的の主意は自分の衣食の料を得るためである。しかし当人はどうあるうともその結果は社会に必要なものを供するという点において、間接に国家の利益になっているかも

知れない。これと同じ事で、今日の午に私は飯を三杯たべた、晩にはそれを四杯に殖ふやしたというのも必ずしも国家のために増減したのではない。正直に云えば胃の具合できめたのである。しかしこれらも間接のまた間接に云えば天下に影響しないとは限らない、否観方みかたによっては世界の大勢に幾分いくぶんか関係してないとも限らない。しかしながら肝心かんじんの当人はそんな事を考えて、国家のために飯を食わせられたり、国家のために顔を洗わせられたり、また国家のために便所に行かせられたりしては大変である。国家主義を奨励しょうれいするのはいくらしても差支ないが、事実できない事をあたかも国家のためにするごとくに装よそおうのは偽りである。——私の答弁はざっとこんなものでありました。

いったい国家というものが危くなれば誰だって国家の安否を考えな

いものは一人もない。国が強く戦争の憂うれいが少なく、そうして他から犯される憂がなければいほど、国家的観念は少なくなつてしかるべき訳で、その空虚を充たすために個人主義が這入ってくるのは理の当然と申すよりほかに仕方がないのです。今の日本はそれほど安泰でもないでしょう。貧乏である上に、国が小さい。したがっていつどんな事が起つてくるかも知れない。そういう意味から見て吾々は国家の事を考えていなければならんです。けれどもその日本が今が今潰れるとか滅亡めつぼうの憂目にあうとかいう国柄でない以上は、そう国家国家と騒ぎ廻る必要はないはずです。火事の起らない先に火事装束しやうぞくをつけて窮屈な思いをしながら、町内中駈かけ歩くのと一般であります。必竟ずるにこういう事は實際程度問題で、いよいよ戦争が起つた時とか、危急存

亡の場合とかになれば、考えられる頭の人、——考えなくてはいられない人格の修養の積んだ人は、自然そちらへ向いて行く訳で、個人の自由を束縛し^{そくばく}個人の活動を切りつめても、国家のために尽すようになるのは天然自然と云っていいくらいなものです。だからこの二つの主義はいつでも矛盾して、いつでも撲殺^{ぼくさつ}し合うなどというような厄介なものでは万々ないと私は信じているのです。この点についても、もっと詳しく申し上げたいのですけれども時間がないからこのくらいにして切り上げておきます。ただもう一つご注意までに申し上げておきたいのは、国家的道德というものは個人的道德に比べると、ずっと段の低いもののように見える事です。元来国と国とは辞令はいくらやかましくつても、徳義心はそんなにありやしません。詐欺^{さぎ}をやる、ごまか

しをやる、ペテンにかける、めちやくちやなものです。だから国家を標準とする以上、国家を一团と見る以上、よほど低級な道徳に甘んじて平気でいなければならぬのに、個人主義の基礎から考える^{あま}と、それが大変高くなつて来るのですから考えなければなりません。だから国家の平穩な時^{へいおん}には、徳義心の高い個人主義にやはり重きをおく方が、私にはどうしても当然のように思われます。その辺は時間がないから今日はそれより以上申上げる訳に参りません。

私はせっかくのご招待だから今日まかり出て、できるだけ個人の生涯を送らるべきあなたがたに個人主義の必要を説きました。これはあなたがたが世の中へ出られた後、幾分かご参考になるだろうと思うからであります。はたして私のいう事が、あなた方に通じたかどうか、

私には分りませんが、もし私の意味に不明のところがあるとするれば、それは私の言い方が足りないか、または悪いかだろうと思います。で私の云うところに、もし曖昧あいまいの点があるなら、好い加減にきめないで、私の宅までおいで下さい。できるだけはいつでも説明するつもりでありますから。またそうした手数を尽さないでも、私の本意が充分じゅうぶんご会得になったなら、私の満足はこれに越した事はありません。あまり時間が長くなりますからこれでご免を蒙ります。

「一冊堂・青空文庫」について

「一冊堂・青空文庫」は、青空文庫を紙の書籍で読むことができるよう、公開されているデータを pdf 形式に変換して、無料で配信させていただいております。変換に際して、旧仮名使い、ルビ等がうまく変換されない場合があります。できるだけ修正するようにしておりますが、お気付きの場合、ご連絡をいただければ、早急に修正データをアップロードいたします。ご協力いただきますようお願い申し上げます。

青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp>) は、著作権の消滅した作品や「自由に読んでもらってかまわない」とされたものを、テキストと XHTML（一部は HTML）形式で公開しているインターネット電子図書館です。青空文庫は、そのサイト運営も含め、電子データの作成や校正作業などはボランティアの皆さんの活動によって支えられています。



一冊堂・青空文庫 pdf データ

2016 年 3 月 15 日 第一期製作

原 稿 青空文庫

発行者 佐藤 聖

発行所 一冊堂

〒165-0025
東京都中野区沼袋 2-32-5 幸荘 C 室
mail : issatudo@gmail.com
